

大津 博歴 だより

2009
No.74

第48回 企画展

道楽絵はがき

— コレクターたちの粹すぎた世界 —

平成21年3月6日(金)～4月19日(日)【月曜休館】



「児雷也豪傑譚」大蛇丸 的場喜三郎
三代 長谷川貞信 (小信) 画
昭和16年 (1941)



舞台裏 田中緑紅
宮尾しげを画 大正15年 (1926)



大津市歴史博物館

「道楽絵はがき」——コレクターたちの粹すぎた世界——

「道楽絵はがき」。これは、コレクターたちが、交換会などの交流の場を通じて自作した趣味の絵はがきで、本展開催にあわせて命名した名前です。今回ご紹介する絵はがきの多くは年賀状です。

電子メール全盛期の現在にあっても、年賀状のやり取りは今も多くの人が行なっています。

大正末になると、木版の年賀状を製作し、交換会を催すコレクターの集まりが行なわれるようになります。この会を催し、参加していたのは、大正・昭和にかけて、絵はがきは勿論、郷土玩具・納札・絵馬など、様々なものを蒐集したコレクターたち。彼らは、普段から単に物を集めるだけでなく、コレクター同士の集まりで、テーマに合った収集品を持ち寄ったり、自らが着想した趣味品を制作・頒布したりと、趣味の世界を存分に楽しんでいました。ですから、交換された絵はがきも、図柄の見立てや素材など、小さな画面の中に様々な趣向が織り込まれた、ちよつと変わった木版絵はがきに仕上がっています。

平成十八年に当館が寄贈を受けた絵はがきコレクター・米谷徳太郎氏の膨大なコレクションには、昭和初期を中心に、米谷氏が参加した様々なテーマの

絵はがき交換会アルバムが数多く残されています。本展では、コレクターたちの趣向を凝らした道楽絵はがきの魅力とともに、絵はがき交換会という、ちよつと粹すぎた趣味を通して、戦前のコレクターたちの交流を紹介したいと考えています。

「道楽絵はがき」の面白さは、なかなか文字だけでは伝わりません。そこで今回は、これが道楽絵はがきだ！と呼べる作品をいくつかお目につけ、その魅力をご紹介することにしましょう。

まずは表紙をご覧ください。舞台裏で虎の着ぐるみをぬいで、くつろぐ姿。これは、大正十五年（昭和元年、一九二六）に田中緑紅が出品した絵はがきです。田中緑紅は、京都の郷土史家である一方、コレクターとして、当時の全国的なコレクター集団「我楽他宗」にも参加するなど、京都のコレクターの中心的な存在でした。今回紹介する年賀状交換会も、緑紅の主催によって、大正十一年からはじまったとされています。ちなみに着ぐるみの絵を担当したのは、漫画家の宮尾しげをです。こういった、ユーモアのある年賀状は他にもあります。

次は、昭和十二年丑年の絵はがき（下右）。出品者は神戸の武村光起です。「神戸名産牛肉味噌漬」。



神戸名産牛肉味噌漬
武村光起 昭和12年



岩井温泉木蛇 藤井好浪
川崎巨泉画 昭和16年

これは広告ではなく、あくまで年賀状です。

こんな年賀状がいきなり贈られてくれば、ちよつと驚いてしまいますが、こういった洒落心が道楽絵はがきの魅力の一つなのです。

道楽絵はがきの魅力は、ユーモアだけではありません。表紙の役者絵は、浮世絵師三代長谷川貞信。右の蛇の絵はがきは、全国の郷土玩具の絵を描いた「おもちゃ絵師」川崎巨泉が描いたものです。コレクターたちは、自らの手によって絵はがきを作るのではなく、絵師に代作をしばしば依頼

しました。これに彫師・摺師といった木版職人たちも加わり、その技術を発揮しています。表紙の役者絵にも見られるように、個人の年賀状とは思えない完成度の高い作品は、彼らの手によって実現したといえます。



宝船 村松百兎庵
三代長谷川貞信(小信)画
昭和8年

ところで、道楽絵はがきは、年賀状だけではありません。交換会は暑中見舞いのほか、様々なテーマで行なわれました。代表的なテーマは宝船。現在では一月二日の初夢が一般的ですが、当時、関西では二月の節分に社寺で宝船の図が頒布されていました。コレクターたちもこれにあわせ、絵はがきを作りました。写真上段は、大阪の村松百兎庵が出品した宝船。百兎庵は、兎に関するものを集めるコレクターなので、図柄に兎が登場します。

また、中段の大津絵があしらわれた絵はがきは三井寺名物「力餅」。これは、諸国の名物の印を捺し、ご当地の図柄を織り込む趣向で行なわれたものです。その他交換会は、国勢調査や郵便局の



大津絵力餅 河本紫香
昭和8年

風景印など、様々なテーマで行なわれました。

最後にご紹介するのは、童画家・武井武雄の作品(下段)。武井は当初、コレクターたちの交換会に参加していましたが、昭和十年に自画自刻自摺を基本とした、「版交の会(のち「榛の会」と改称)」を立ち上げます。この会には、恩地孝四郎・前川千帆・関野準一郎など創作版画家たちが積極的に参加し、道楽絵はがきとは異なる作品世界を作りました。展覧会では、これら榛の会交換作品もあわせて展示、同時期に行なわれた二つの交換会を比較してお目にかきたいと考えています。

紙面の都合もあり、多くを紹介できませんが、道楽絵はがきのもつ魅力の一端をお分かりいただけたかと思えます。この絵はがきは、実は図柄を楽しむだけではありません。交換会というシステムの面白さや、今回紹介したコレクターたちの人物像や交流の様子など、掘り下げていくと様々な面白

さや発見があります。これらについては、展覧会や会期にあわせて開催する「れきはく講座」でご紹介させていただきたいと思えます。続きは是非会場でご覧ください。

観覧料 一般 六〇〇円(四八〇円)

高大生 五〇〇円(四〇〇円)

小中生 二〇〇円(二六〇円)

※(内は前売り・一五名以上の団体・市内在住の六五歳以上の方・市内在住の障害者の方の割引料金)

主催 大津市・大津市教育委員会・

大津市歴史博物館・京都新聞社

後援 BBCびわ湖放送・NHK大津放送局

エフエム滋賀

協力 大正イマジュリー学会



子年年賀状 武井武雄
昭和11年

大津で製作されていた踏車ふたぐるま

大津市今堅田は、琵琶湖大橋の西詰めに位置し、出島灯台（大津市指定文化財）がある地域で、近年、住宅地が急増し、景観も大きく変わってきたところです。出島灯台周辺には、船大工が集住し、木造和船を建造する造船所でしたが、生業として今堅田全体から見ると農村だったといえます。ここに、水を揚げる踏車を製作する大工「大善」がありました。一〇月から一二月にかけて開催したミニ企画展「今堅田の水車大工」で、「大善」に残されていた踏車の製作道具を紹介させていただきましたので、その一部を報告します。

踏車について

まず、踏車の説明からはじめましょう。図のように、輪を人間が踏んで回転させ、低位の水を高い位置に揚げる道具で、機械化される前の湖岸農村で盛んに使われていました。目の前に琵琶湖があり、内湖やクリークが縦横にはしっていた湖岸農村の耕地は、周りを水に囲まれていましたが、こうした耕地を灌漑する水は上流から流れてくる用水や雨（天水）を頼りにしていました。ですから、日照りがつづくと、目の前に水がありませんが、耕地は干上がってしまいます。そこで、活躍していたのが、揚水機だったのです。

江戸時代後期、多くの農書を著した大蔵永常おほくらながねは、文政五年（一八二二）『農具便利論』という本を著し、その中で踏車にも触れています。

昔年より井路いぢの水を高燥たかのみの田地へ揚るには、龍骨車りゅうこつぐるまを用る事、諸国一般なりしに、寛文中より、大坂農人橋の住、京屋七兵衛、同清兵衛といへる人、此踏車を製作し宝曆、安永の頃までに諸国に弘り、今は龍骨車を用ゆる固すくなし。

永常の記述に従うなら、踏車は一七世紀後半の寛文中に大阪農人橋（大阪市中央区東横堀川に架かる橋）の京屋七兵衛・清兵衛によって発明された

ようです。農人橋の京屋は、唐箕たぢみの製造で知られる農具商ですが、踏車もこの京屋にかかる農具でした。そして、一八世紀後半の安永頃までに、全国に普及したと記しています。

県内の踏車の状況ですが、博物館や資料館に収蔵されている踏車の製作地を問い合わせ、大雑把な傾向を考えてみました。湖東地方の踏車は、近江八幡市北之庄の「蛇車屋じゅうぐるまや」によって製作されたものが多いようです。湖北地方に目を転じると、中京圏で製作された農具が多く入っていたようで、大垣市の農具が普及していました。そして、湖南・湖西は「大善」の踏車が広く使用されていたようです。

「大善」について

今堅田で代々宮大工を営んでいたのが「大善」です。伝えられるところでは、「大善」こと本城家は、応仁の乱で京を焼け出された大工の棟梁で、江戸時代には今堅田にあつて中井家大工支配に組み込まれ、宮大工として近隣の神社仏閣の普請にたずさわっていたようです。

踏車など水車を扱うようになった時期は定かではありませんが、踏車の型の墨書銘からみて、幕末には踏車を製作していました。そして、農業の機械化が進む昭和三〇年代まで製作していたようです。

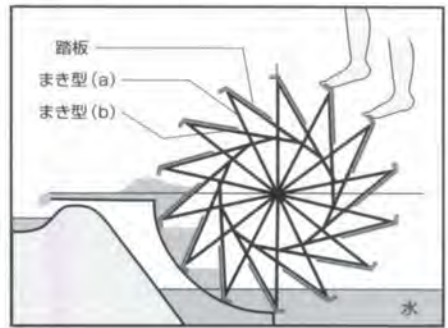
踏車は、輪の径が四尺から六尺五寸まであり、それぞれの需要に合った大きさが利用されていました。踏車は、いくつかのパーツで構成されており、パーツ毎に型を作り、それに合わせて部品を作成して、組み立てる手順で作られていました。



まき型五尺
左まき型(a)
右まき型(b)

まず、輪は、真棒と踏板、それをつなぐ棒の組み合わせで出来ています。正確には、真棒と踏板をつなぐ棒（a）、その棒と踏板を角度をつけて支える棒（b）、の二種類の組み合わせで輪が出来ているのです。ですから、輪の基本的な部材を作るためにはこの二種類の型が用意されていました。

次に踏板部分では、この棒を受ける角度が問題になるため、その型も作られました。そして、真棒の型も残されています。輪の大きさによって円周も変わるので、踏板の数も変わります。ですから、真棒もそれに合わせ二角から八角まで作られました。真棒の型は、木口（小口）の型と、筒状の型が残されており、筒状のものは、八角、一四角、一六角の型があります。



踏車のサイズは、四尺や五尺、五尺五寸といった風に輪の大きさを表現されます。つまり五尺であれば、統一した種類の型があれば五尺の踏車が出来ると思っていたのですが、大善の型を見てそんな単純なものではないことを思い知らされました。

真棒と踏板をつなぐ二種類の棒の型がたくさん残されており、それぞれに墨書があります。この棒を「マキ型」と呼んでいたようで、ここではマキ型としますが、同じ五尺でも一八種類のマキ型が作られていました。つまり同じ五尺の踏車といっても、一八種類の踏車が造られていたことになりました。それぞれの長さは異なりますが、出来上りの輪の大きさは同じなので、角度が個々に異なることになりました。五尺の踏車の真棒径も三寸六分と三寸八分、柵数も一四角と一五角のものがあつたようです。

同じ五尺でも、様々な踏車が作られた要因を、墨書から見ると、「改

良」「発明」「新工夫」といった文字が見られ、よりスムーズに水を揚げるための試行錯誤が重ねられていたことがうかがえます。また「雄琴形」「品吉田形（草津市志那町）」「新浜形（草津市新浜）」といった地名を冠した型も見られ、地域の要望に則した工夫が施されていました。

「大善」に残されたマキ型の数から見て、最も需要の高かったのは、五尺五寸と五尺です。また作られた時期ですが、最も古いものは安政四年（一八五七）で、幕末が八件見られ、多いのは、明治期の三三件です。製品の工夫、改良が進んだ時期は、最も需要が高かった時期と考えるとよいでしょう。「大善」にとって明治期は、最も繁昌した時期だといえそうです。

踏車は、全国的に見られた農具ですが、農業の機械化とともに姿を消し、その製作の過程が分かる資料が残されていることは稀です。それだけにこの資料は貴重な内容といえることができます。

館蔵の踏車について

当館は、本堅田の農家で、明治期に使用されていた踏車を収蔵しています。焼印がうっすらと残る程度で、製造地を判定することもできませんでしたが、おそらく「大善」製だろうと考えていました。今回、マキ型をあててみると、「五尺発明形 并柵大善工場」「明治二十一年子九月吉日 拾四柵」とあるものと一致し、この踏車が、明治二十一年以降に製造された大善製であることが分かりました。

（和田 光生）

	マキ型の数			マキ型製作年代				真棒径				真棒角(柵数)									
	aのみ	bのみ	計	幕末	明治	大正	昭和	不明	3寸2分	3寸6分	3寸8分	4寸	4寸2分	12角	13角	14角	15角	16角	17角	18角	
四尺	2	0	0	2	1	1	0	0	0	●	●										
四尺五寸	3	0	1	4	1	2	0	0	1	●	●			●	●						
四尺七寸五分	1	0	0	1	0	1	0	0	0	○	○										
五尺	8	2	8	18	3	7	3	1	4	●	●										
五尺二寸五分	5	0	2	7	2	4	0	0	1		○										
五尺五寸	9	2	10	21	0	11	4	0	5	●	●										
五尺七寸五分	1	0	0	1	0	1	0	0	0			○									
六尺	2	2	2	6	1	5	0	0	0			●	○								
六尺五寸	1	0	0	1	0	1	0	0	0												●

●は、小口の型が残されているもの。

第七回 ミニ企画展 大津の仏教文化9

三井寺護法善神堂の土人形・伏見人形

平成二十二年三月十七日(火)～四月十九日(日)

「千団子さん」で有名な三井寺(園城寺)の護法善神堂には、参拝者が奉納した土人形が多く伝存していることはあまり知られていません。

土を型どりして造形し、焼き上げた後に彩色を施す土人形(京都市伏見で造られた「伏見人形」が最も有名)は素朴な魅力で人気がありますが、特に三井寺の土人形は作も優れ、さらに採用されている図像(型)もバリエーション豊かで、見ていて飽きません。

今回のミニ企画展では、三井寺護法善神堂に伝来するものを中心に江戸から昭和時代にかけて造られた土人形、伏見人形を展示し、三井寺の信仰と土人形の美を紹介します。



犬抱き童子



こそずきん
お高祖頭巾



まんじゅうく
饅頭喰い

なお、本展の後には、四月二十一日(火)から六月十四日(日)までの会期で、第七回ミニ企画展「平成二十年度 新指定・新収蔵品展(仮称)」の開催を予定しています。

大津歴博だより No.74
平成21年1月9日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077) 521-2100
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>